

聖書：Ⅱペテロ 3：8～9

説教題：ひとりでも滅びることを望まず

日時：2018年4月29日（朝拝）

ペテロは主の再臨の日が来ること、それとセットで最後のさばきの日が来ることについて語っています。この手紙はイエス様が復活して天に昇ってから 30 数年後に書かれたと思われませんが、当時すでに主の再臨などないのだ！と主張する人たちがいたようです。彼らは「最後のさばきなどない。だからその日を恐れて歩む必要はない。」と述べて、不道德な歩みを許容し、実践し、人々をそこへ招いていました。今日はどうでしょうか。1 世紀でさえすでにそうだったなら、2000 年も経つ今日は益々そうであってもおかしくないことになります。もしかすると信仰を持っている私たちも、主の再臨のメッセージをあまり現実的なものとしては考えていないかもしれません。いつかその日が来るということは受け止めていても、自分とは関係ないことだと思っていることはないでしょうか。そんな私たちにペテロは大切なメッセージを思い起こさせてくれています。

前回は 1～7 節を見て、今日は 8 節からになります。これまでのところで、神は御心により、いつでもさばきを行うことができるということが語られました。しかしまだ問いが残っています。ではなぜその日はまだ来ないのかということです。それにしてもずいぶんその実行が遅いのではないかとということです。これについて今日の箇所では二つの答えが述べられます。一つは 8 節に、もう一つは 9 節に。それぞれ順番に見て行きますが、二つ目の方が語るべき内容を多く含んでいると思われしますので、そちらに重きを置きながら、今日の二つの節を見て行きたいと思います。

まず一つ目は 8 節です。「しかし、愛する人たち、あなたがたはこの一つのことを見落としてはいけません。主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」ここで述べられている言葉のもとになっているのは詩篇 90 篇 4 節です。「まことにあなたの目には千年も昨日のように過ぎ去り、夜回りのひと時ほどです。」ここに私たち人間にとっての時間と神にとっての時間は異なることが述べられています。私たちににとっての長い期間も神の前では一瞬の出来事かもしれない。もし私たちににとっての 1000 年が神の前の 1 日に相当するなら、どうなるでしょう。当時の人々は 30 年間、主の再臨を待ち続けましたが、それは神の前ではたった 43 分少々待っただけのことにしかありません。では 2000 年後の私たちはどうでしょう。1000 年が一日であるなら、

2000 年は二日です。ですからこちらも「遅い！」と言えるほど、時は経っていないと言えます。もちろん 1000 年イコール一日と言われているのではなく、一日のようだとされていますので、単純計算できる話ではないのですが。先ほど引用した詩篇 90 篇 4 節では、私たちの時間のはかなさ、些細さという側面が前面に出ています。しかしペテロは、それと反対のことも言います。すなわち私たちの過ごす一日が神の前では 1000 年のようであると。もし私たちの 1000 年が主の前の一日だと言うだけなら、私たちの時間は取るに足りないものということになります。しかし反対に私たちの一日が主の前の 1000 年に相当するとしたら、私たちの一分一分はとてつもない重みのあるものとなって来ます。一秒一秒が神の前で重大な意味を持つ瞬間の連続になる。そのことを思えば、私たちは自分の人生を決して無駄にしてはならないし、その時間を軽んじてはならないということになると思います。

いずれにしてもペテロが言いたいことは、私たちの感覚で神の時を計ることはできないということです。神は時間を超えておられます。歴史に閉じ込められている方ではなく、私たちと次元の異なる方です。正確なたとえにはなりません、犬や猫の寿命は私たち人間とは違います。ですから彼らが持つ時間感覚と私たちの感覚はかなり違うと思います。反対に「亀は万年」と言われる亀も、私たちの時間感覚とは相当に違うでしょう。小さな虫、微生物に至っては、全く世界が異なります。そのことを考えれば、ちっぽけな私たちの頭で、聖なる神様の時についてあれこれ批判じみたことを言うのは、自分をわきまえていない全く愚かな者の姿ですし、ナンセンスなことなのではないでしょうか。ペテロはこうして私たちが上を見上げて、神のタイムテーブルに委ねるように勧めています。イエス様も再臨の日について、天の御使いたちも、またご自身も知らないと言われました。ただ父だけが知っておられると。その日は父なる神がお定めになった最も良い日に起こる。だから私たちは自分勝手な尺度で、その日はいつかと論じるのではなく、いつでも良いように準備しているようにとされています。そのことこそが新約聖書を通じて私たちに一貫して命じられていることです。

さてペテロはもう一つの説明を 9 節で述べています。こちらではより私たちが納得できる理由が述べられています。「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」ここで言われていることは、その日は遅れているように見えるのは、神がそのことを忘

れているからではない。あるいは神にその力がないからでもない。そうではなく、あなたがたに対して忍耐深くあられるからだと言われています。

ここに神の驚くべき愛とあわれみが示されています。主の再臨の日がまだ来ていないのは、主が忍耐に忍耐を重ねて、その時を伸ばしてくださるからなのです。ここに何と賛美すべき神のご性質が示されているでしょうか。私たちはこれと反対ではないでしょうか。私たちに忍耐はあるでしょうか。私たちはすぐにキレやすい者たちではないでしょうか。12弟子のヤコブとヨハネは、サマリヤを通った時、彼らがイエス様を受け入れないのを見て、こう言いました。「主よ、私たちが天から火を呼びくだして、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」もし神がこのような短気な方であれば、この世界はとうの昔に滅ぼされていました。

しかし神は忍耐深く、この世界を扱って来られました。先にノアの洪水について見ましたが、あのさばきでさえ、I ペテロ 3 章 20 節に「ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神は忍耐して待っておられた」とあります。あの時も神は、ノアを通して、人々が悔い改めて救われるのを待っておられました。またイスラエルの歴史を振り返っても、神は何人の預言者を送ったでしょうか。私たちが神だったら、いつも神を軽んじ、神に不平不満を述べ、神が遣わした預言者を退けるイスラエルなどすぐ焼き滅ぼしてしまったのではないのでしょうか。しかし神は次々に預言者を送り続け、神に立ち返るように招き続けました。そのことを振り返るだけでも、神のご忍耐がどれほどのものかが改めて心に刻まれます。この神を思うなら、「なぜ再臨は遅れているのか」などと言うべきはないと思います。むしろ私たちは口に急いで手を当て、ひれ伏して感謝してこそ本当ではないのでしょうか。

さてこの9節は色々問題になるころでもあります。この節後半に主は「だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」とあります。新改訳第3版では、主は「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」とあります。これはこの神の意思によって、すべての人が救われることを暗示しているのでしょうか。すなわち万人救済説を支持するものでしょうか。そうでないことは聖書全体から明らかです。直前の7節に、不敬虔な者どもがやがての日にはさばかれると言われていました。ではどういうことになるのでしょうか。聖書は「救われる人」と「そうでない人」がいるとはっきり語っています。そして救われる人は「神

の選びによる」とも言っています。とすると、救われない人がいると分かっているのに、神はすべての人が救われることを望んでおられるなどと言うことは、矛盾した話にならないだろうかということです。神は本当に、すべての人の救いを真心から真剣に望んでいるのか。それとも、そのつもりは最初からないのに、そういうふりをしているだけなのか。そういう疑問がここに起こって来るわけです。

果たしてこれはどう考えたら良いのでしょうか。神は救われない人がいることを知っていたながら、一方では誰も滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでいると言います。この神の意思はどこまで真実なものなのでしょうか。結論から言えば、確かにこれらの二つのことは、私たちの頭の中ではぶつかります。しかし私たちが取るべき道は、たとえこの両者が私たちの頭の中で矛盾・対立するように見えても、この両方を聖書が啓示している真理として、100%そのまま受け止めるということです。私たちが往々にして犯しやすい誤りは、自分の頭にうまく収まるように一方の好む考えを持ち上げ、もう一方を弱めることです。ある人は、神がすべての人の救いを真心から望んでいるという面を強調するあまり、神の主権や選びの教理を弱めます。神はすべての人に救われてほしいと願って皆に平等に福音を差し出している。ではなぜ救われる人と救われない人が起こるかと言えば、それは人間がそのように選択したからと言います。これは歴史的にはアルミニウス主義と呼ばれる立場です。この考え方では、最終決定権を持っているのは人間になります。すべては人間の決断と選択にかかっています。神が主権者ではありません。ですから最後にどういう結果に至るかは、人間だけでなく神も分からないことになります。神は救いを用意くださいましたが、人間が拒否することによって、最後の日が来た時、計画したことが全然達成できていなかったということさえ起こりかねません。また一方の人は神の主権や選びを強調するあまり、今日の箇所の意味を弱めます。すなわち神は文字通り、すべての人の救いを望んでいるわけではないと。そしてそのための一つの解決法として、ここでの「すべての人」は「すべての信者」という意味だと取ります。神は信者以外の人に対してはここに述べられているような慈愛の心も持っていないし、忍耐の心も持っていない、と。

しかし私たちが取るべき道は、私たち有限な者たちの頭にうまく調和しなくても、聖書がそう述べているなら、無理やり合理的に説明しようとせず、神が啓示されたまま、両方を真理として保ち、受け入れることです。実際私たちは三位一体の教理をそのように受け止めているのではないのでしょうか。神が3であり、1であるというのは、私たち

の頭の中でぶつかることです。しかし私たちは自分に理解できないからと言って、無限の神についてのこの真理を否定しません。自分の小ささをわきまえるならそうです。あるいはキリスト二性一人格の教理もそうです。キリストはまことの神であり、まことの人である。私たちの頭で考えると、めまいがして来そうです。しかしそれを受け止めるところにしか救いはありません。それと同じことだと思います。神がある人を救いに選び、他の人はそうはされなかったという御心は、神の永遠のご計画に属する、神の内にもみ秘められた御心で、聖定的な御心と言われます。一方、神はすべての人がキリストのもとに来て、この方を信じ、悔い改めて救われることを心から望んでいると仰っています。なぜ神はすべての人が救われることを聖定的には意思していないのに、すべての人が救われることをご自身の意思であると仰っているのか。あるいは反対に、なぜ神はそれほど熱烈にすべての人の救いを望んでいるのに、ご自身の全能の力と主権によってそれを成し遂げられないのか。これは一言で言えば神秘です。私たちはこれが自分の頭にうまく収まらないからと言って、どちらかを投げ捨ててはならないのです。むしろ小さな頭の持ち主である私たちには、今は理解できない神の豊かさがここに啓示されていることを仰いで、その前に額づき、両方をあがめるべき真理として受け入れるべきなのです。

そのことを受け止める時、今日のまとめとしてここから二つの結論が導かれると思います。一つは今日という日は、昨日までと同じようにやって来て、ただ過ぎ去って行く機械的な日ではないということです。今日という日があるのは、神の私たちに対する忍耐と慈愛の現れです。一人でも滅びることがないように待っていてくださる御心の現れです。これはすでに信仰を持っている者たちにも当てはまると思います。私たちはまだまだ聖められ、成長して行くプロセスを踏み進んで行かなければなりません。そのために与えられている貴重な時と感謝して、私たち自身、この時を自分の救いのために生かす者でなければなりません。

もう一つは福音宣教に関することです。神はひとりでも滅びることを望みません。これは見せかけではなく、真実で熱心で純粋な御心です。私たちはこの神の思いを自分の思いとして受け止めているのでしょうか。1章4節で見たように、聖化のゴールは「神のご性質にあずかる者となること」です。ですから私たちがきよめられて行くことは、神が世界に対して持っているのと同じような心を、私たちが世界に対して持つ者となることを含みます。私たちが福音を携えて行く時、それは単に私がある人に救われてほしい

と思うから、そうするわけではありません。第一に重要なメッセージは、神がその人の救いを真心から願っているということです。私たちは相手の人が選ばれているかそうでないかと考えて伝道するのではなく、神があなたの救いを心から願っているという確信を持って、その道具としての働きをするのです。この神の思いを私たちは自分の内に確信して、主を伝えるわざに当たりたいと思います。神はひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられます。この神の思いを私たちの心に刻みつけていただいて、日が延ばされている今の時を感謝し、この時を御前で用いる歩みへ進みたいと思います。